

## 1 経営的特徴と導入方法

ヤナギ類の栽培は、比較的容易で、土質や気候条件をあまり選ばないが、連作するとさび病が発生しやすい。

労力は10当たり30～40人ですむが、単位面積当たりの収益が多くない上に、経済的な寿命も短いので、補完的な品目として取り入れた方が良い。

表1 10a当たり作業別所要労働時間（アカメヤナギ）（単位：時間）

### ① 作業別労働時間

項目	時間	項目	時間
親株管理	8	収穫	8
かん水	10	調製・選花	36
病虫害防除	36	搬出・出荷	40
除草	44	合計	298.0

(注)

1. 花き産地構造調査報告書  
茨城県(1998.3)

### ② 旬別労働時間

月	1月			2月			3月			4月			5月			6月		
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
時間	1.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.0		10.0				2.0	3.0	22.0	3.0	3.0	22.0	3.0

7月			8月			9月			10月			11月			12月			合計
上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
2.0	4.0	2.0	2.0	4.0	2.0	2.0	2.0	22.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	298.0

## 2 生理生態的特性と適応性

### (1) 生理生態的特性

ヤナギ科、ヤナギ属、温帯原産の落葉樹で、わが国にも40種以上があると言われているが、この中で切枝として用いられているものは、ほう芽時の芽の色が美しいものや、枝が石化したり、曲がりをもった特徴のあるものに限定されている。

枝物として利用する種はヤナギ属が中心であり、これらは雌雄異株であるが、花芽分化期はほぼ同じである。花芽は新梢の葉えきに分化する。分化期は種によって異なるが6月中旬頃より始まり、9～10に完成する。

「アカメヤナギ」の花芽分化は6月中旬に始まり、7月中旬にはりん片が形成され、8月上旬から雄ずいが発育して、外観的に芽がふくらみ、10月上旬には花粉が形成されている。葉が健全でないと、花芽分化が多くなる。

「セッカヤナギ」、「ウンリュウヤナギ」は7月頃花芽分化が始まり、9～10月に完成する。

開花期は地域により異なるが、およそ3～4月で、尾状花穂をつける。

### (2) 適応性

耐寒性があり栽培はきわめて容易である。促成出荷するには寒さの早い本県は有利だが、高標高地帯では

花つきが悪い。耐湿性の強いものが多く低湿地や畦畔にも栽培が可能である。しかし、「アカメヤナギ」や「クロメヤナギ」などは、日当たりが良くやや乾燥気味のやせ地の方が節間がつまった花芽の着生の良いものができ、「セッカヤナギ」は耕土の深い肥よくな土地の方が適している。

### 3 作型と品種

作 型	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備 考
枝ぶり露地栽培	[ ] _____ [ ]												ウンリュウヤナギ
冬芽露地栽培	[ ] _____ [ ]												アカメヤナギ クロメヤナギ ギンメヤナギなど
	Ω — 加温 — Ω												
	* ■■■ [ ] _____ *												
	_____ × - × ■■■ [ ] _____												

注) [ ] : 収穫・出荷期間 \*-\* : 切り枝収穫期間 ■■■ : 切り枝促成・出荷期間 × : 摘心

#### (1) 作 型

##### ア 枝ぶり露地栽培

「コオリヤナギ」、「セッカヤナギ」等は枝ぶりを鑑賞する。枝が堅くなる9月頃から春先の開苞前までの期間、露地より切り枝し出荷する。

##### イ 冬芽露地栽培

「アカメヤナギ」、「クロメヤナギ」、「ギンメヤナギ」は冬芽（花芽）を鑑賞する。出荷期は12月頃より開苞までである。

##### ウ 花穂促成、露地栽培

「ギンメヤナギ」、「クロメヤナギ」等の開花直後の花穂を鑑賞する。促成は芽がふくらみ、苞が取れるようになったら10～15℃の乾燥した温室で苞を除いた後、20℃前後に加温して開花させ出荷する。露地物は3～4月頃自然に開花したら切り枝する。

##### エ 新芽促成、露地栽培

「ウンリュウヤナギ」は新芽を鑑賞する。促成は休眠が明ける2～3月に切り枝し、水揚げ後10～15℃の温室に入れ、湿度を高めを保ちほう芽させる。露地物は4月頃自然にほう芽したら切り枝する。

#### (2) 品 種

##### ア 「アカメヤナギ」

種名はフリソデヤナギで樹高が5m位になり、たく葉がボケに類似している。栽培種は雄本のみである。冬芽が大きく（約17mm）、美しい紅色をしているので「アカメヤナギ」と呼ばれる。生花として利用され、ヤナギの中では最も需要が多い。節間がつまり、枝の先まで花芽が着生しているものが良品とされる。

さび病に弱く連作すると発生が多くなり、早く落葉するので花芽がつかなくなり、薬剤防除しても経済的な面で栽培は不利になる。さび病に強い品種も育成されているが晩生で花が少なく、苞や茎の色もやや

悪い。湿りの多い土だと節間が伸びるので乾燥気味の土地に向く。霧のかかるところではさび病が多発しやすい。

「スーパーアカメヤナギ」は「アカメヤナギ」の改良種でさび病抵抗性があり栽培しやすい。苞の形、大きさなど形態的には在来種と大差ない。

#### イ 「ウンリュウヤナギ」

高木、小枝が細く、屈曲して下垂し、オリーブ色または淡黄褐色である。葉は葉身全体が上下に大きく波曲する。枝ぶり、新芽を鑑賞する。強健で樹勢がおう盛となり分枝も多い。切り枝する場合には、毎年切り戻しをして細かい枝を発生させる。

#### ウ 「ギンメヤナギ」

種名はオオキツネヤナギで樹高1～2mの低木である。冬芽が大きく（約15mm）、黄色であるためギンメヤナギと呼ばれ生花に使われる。また、早春開花時に長い軟毛が銀白色になり、切り枝し鑑賞する。

#### エ 「クロメヤナギ」

2m程度の低木。雌本はない。開苞後の花芽の色が黒紫色で光沢があり、変わった美しさがある。さび病にはアカメヤナギよりは強い。花芽がつきにくく、やや作りづらいので施肥は控え目にし、多湿地での栽培は避けた方がよい。

#### オ 「コオリヤナギ」(コリヤナギ)

2～3m程度の低木。柳行李の材料である。細く直立した枝が生け花の材料として使われる。1月以降は促成して早春に咲く小型の花も価値がある。また乾燥した後はく皮して染色し、ドライフラワーとしても利用されている。

#### カ 「セッカヤナギ」

オノエヤナギ（種名）の枝の上部が帯化したものである。高木、枝が石化し、その形が変わっているので主に生け花の花材として需要がある。

この他に「アズキヤナギ」、「ピンクヤナギ」、「キンメヤナギ」、「ハクロヤナギ」などがある。



ウンリュウヤナギ



セッカヤナギ

## 4 栽培

### (1) 繁殖、苗づくり

ヤナギ類はどの種類も発根しやすいので、直接本ばに挿し木する方法がよい。床挿しをする場合には、ほ場を中耕して1m幅の床を作り15cm×15cmにさし木する方法がよい。ビニールトンネルを行うと初期生育がよくなり側枝の伸びも早い。ほう芽開始期に高温障害を受けやすいので、管理面ではかえって黒ポリマルチの方が簡単である。挿し穂は切り下枝か前年枝の下部の葉芽の太く充実した部分を15～20cmに切り、水揚げをして挿し穂の1/2～2/3の深さを土の中に埋め込む。

なお「セッカヤナギ」では、石化率のよい系統を選んで栽培することが大切で、石化した枝から挿し穂をとると石化率が向上するので、母樹の選択が重要である（表2）。しかし、同一系統でも環境条件によって石化の状態は異なる。特に若木の間は石化しにくいので肥料を多く施すようにする。

表2 セッカヤナギの挿し穂と石化率

(昭和60年 島根農試)

挿し穂の由来	調査株数 A (株)	1年目					2年目					石化枝				無石化枝 重さ (g)
		枝梢数	石化枝数	枝梢長さ (cm)	石化株数 B	石化株数 B/A (%)	枝梢数 C	石化枝数 D	石化枝数 D/C (%)	株当たり 石化枝数 D/A	長さ (cm)	切口径 (mm)	重さ (g)	石化幅 (mm)		
		(本)	(本)	(株)	(%)	(本)	(本)	(%)	(本)	長さ (cm)	切口径 (mm)	重さ (g)	石化幅 (mm)	重さ (g)		
石化株の石化枝	12	18	4	79.3	12	100	291	83	29	6.9	128	10.3	70	15	52	
石化株の無石化枝	11	15	1	68.2	10	91	244	58	24	5.3	125	10.6	72	15	47	
無石化株の枝	12	14	0	80.0	7	58	310	25	25	2.1	144	11.0	87	13	51	

### (2) ほ場選定

日当たり、風通しの良い圃場を選ぶ。

### (3) 土壌改良、施肥

堆肥を10a当たり2トン、苦土石灰、熔成燐肥等の土づくり肥料等を施して耕耘整地する。土壌pHは5.0～6.0がよい。

「アカメヤナギ」は、窒素過多で徒長し、花芽の着生が祖になり品質の低下を招く。また、さび病もつきやすくなる。一方、「セッカヤナギ」は多肥栽培により石化率が高まる。従って、品質の特性に合わせた施肥が必要である。定植初期は、発芽前にうね全面に基肥散布する。「アカメヤナギ」は窒素、りん酸、加里を10a当たりの成分で8～10kg程度、「クロメヤナギ」は10kg前後、「セッカヤナギ」は窒素20kg、りん酸10～15kg、加里15kg程度施用し、除草をかねて通路部分の中耕する。2年目以降は肥料が効きすぎると枝が大きくなり、節目が伸長するので10a当たり三要素とも5kg程度春の芽吹き前に施す。ただし、「セッカヤナギ」は肥料を多く必要とするので10a当たり窒素20kg、りん酸10kg、加里15kg前後施す。

「アカメヤナギ」は入梅の頃にりん酸、加里を5kg程度追肥する。これは苞や樹皮の色を鮮明にする効果がある。「セッカヤナギ」は8月以降肥料成分が残ると2番枝が太くなり品質が低下するので追肥は行わない。

### (4) 定植

養成苗を定植するか、本ばに直接直挿しする。ヤナギ類は発根しやすいので、発根促進のため、黒ポリマルチを張り、ほ場に直挿しした方が、作業的には有利である。

時期は4月頃がよい。「アカメヤナギ」では、うね幅1.0m、株間を60cmとする。その他の種類は、うね幅1.2m、株間90cmとする。挿し木は「繁殖、苗づくり」の項に記載した内容と同じに行う。

いずれの種類も土を盛り上げ、排水を良くする。「コウリヤナギ」は水田で高うねにして、通路に水を張ると根の伸長が水面で止まり、黄緑色の品質の良い枝が収穫できる。

#### (5) 定植（直挿し）後の管理

##### ア マルチの除去

高温期にはマルチと接する部分が焼けたり、枯込みが入るので、6月下旬にマルチを除去する。

##### イ 整枝、せん定

- ・定植1年目は整枝、せん定は行わない。
- ・定植2年目の春に株元から15cm程度のところでせん定して主幹を作る。定植3年目の春に側枝を15cm程度で切り、3～4本の主枝を作る。
- ・以降は毎年春に3～5cm残して丸坊主にせん定する。ただし「アカメヤナギ」、「コオリヤナギ」、「ウンリュウヤナギ」やほ場条件の良すぎる「セッカヤナギ」のように、生育がおう盛になりすぎると、枝が太くなって商品価値を落とす種類では、5月か6月に新梢の太い枝だけ30～50cmで摘心して枝数を増やす。

## 5 主要病害虫とその防除対策

### (1) 病 害

葉さび病、黒紋病、うどんこ病、根頭がんしゅ病などが報告されている。さび病に対してバイレトン乳剤、バシタック水和剤、プラントボックスなどの登録がある。

### (2) 虫 害

ハマキムシ類等が加害するが、他の害虫も含めて県内では不明な点が多い。

## 6 収穫・促成・出荷

### (1) 露地物出荷

「コオリヤナギ」は7月頃から、「アカメヤナギ」及び「セッカヤナギ」は、9月から4月頃の開苞期までに出荷する。「アカメヤナギ」は出荷計画に合わせて9月上旬から中旬までに先端の展開葉を5枚くらい残して全部摘葉すると2週間後に苞や茎が紅葉してくる。落葉前のお荷では、切り取って手で葉をむしるか、打ち水して葉を湿らせたものをコモに包み、蒸らして落葉させる。

枝を70～110cmに調整し、10本単位で束ね、段ボール箱やシートに包んで出荷させる。

### (2) 促成物出荷

1月～3月にかけて「アカメヤナギ」、「コオリヤナギ」、「アズキヤナギ」の花物を出荷するには促成をする。切り枝を2日間程度水揚げし、ガラス室かビニールハウスに入れ夜温10～15℃、日中25℃程度に管理し、上部は直射光線が当たらないように遮光し、1日当たり2回程度のシリンジと土間への散水を行う。脱苞が始まったら換気をはかる。1月で10日前後、2月で7日前後で出荷できる。

「ウンリュウヤナギ」と「ハクロヤナギ」は2月～3月にかけて、それぞれ切り枝したのちにハウスに10

日間ぐらい入れ、新芽が発生したとき出荷する。

#### 参考・引用文献

- 1) 伊藤健、鈴木義孝、「農業技術体系花卉編11 花木、観葉植物」、農産漁村文化協会（平成6年）
- 2) 船越桂市、「花木枝物の営利栽培」、農業図書（昭和59年）
- 3) 松本弘義、「新特産シリーズ―枝物―」、農産漁村文化協会（平成10年）
- 4) 亀井孝祐、「切り花栽培技術マニュアル1」、誠文堂新光社（平成4年）
- 5) 村井千里、「切り花栽培技術マニュアル3」、誠文堂新光社（平成4年）

# ヤナギ類栽培ごよみ

月	旬	生育状況	作業	栽培の要点	摘要																																																																			
3	上	中	定植準備	<p>1 作型</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>1</th> <th>2</th> <th>3</th> <th>4</th> <th>5</th> <th>6</th> <th>7</th> <th>8</th> <th>9</th> <th>10</th> <th>11</th> <th>12</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>枝ぶり 露地栽培</td> <td colspan="11">[ ] _____ [ ]</td> <td>コオリヤナギ セッカヤナギなど</td> </tr> <tr> <td>冬芽 露地栽培</td> <td colspan="11">[ ] _____ [ ]</td> <td>アカメヤナギ クロメヤナギ ギンメヤナギ</td> </tr> <tr> <td>花穂促成、 露地栽培</td> <td>Ω _____ Ω</td> <td colspan="11">* ■ ■ ■ [ ] _____ *</td> <td>ギンメヤナギ クロメヤナギ</td> </tr> <tr> <td>新芽促成、 露地栽培</td> <td colspan="11">— × - × ■ ■ □ _____</td> <td>ウンリュウヤナギ</td> </tr> </tbody> </table> <p>[ ] 収穫・出荷期間      *-* 切り枝収穫期間                  ■■■ 切り枝促成・出荷期間      × 摘心</p>		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考	枝ぶり 露地栽培	[ ] _____ [ ]											コオリヤナギ セッカヤナギなど	冬芽 露地栽培	[ ] _____ [ ]											アカメヤナギ クロメヤナギ ギンメヤナギ	花穂促成、 露地栽培	Ω _____ Ω	* ■ ■ ■ [ ] _____ *											ギンメヤナギ クロメヤナギ	新芽促成、 露地栽培	— × - × ■ ■ □ _____											ウンリュウヤナギ	
					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考																																																							
	枝ぶり 露地栽培				[ ] _____ [ ]											コオリヤナギ セッカヤナギなど																																																								
	冬芽 露地栽培	[ ] _____ [ ]											アカメヤナギ クロメヤナギ ギンメヤナギ																																																											
	花穂促成、 露地栽培	Ω _____ Ω	* ■ ■ ■ [ ] _____ *											ギンメヤナギ クロメヤナギ																																																										
	新芽促成、 露地栽培	— × - × ■ ■ □ _____											ウンリュウヤナギ																																																											
	中	下	せん定																																																																					
	上	中	苞		基肥																																																																			
	下					定植																																																																		
	上	中	新芽展葉		<p>2 品種 アカメヤナギ、ウンリュウヤナギ、ギンメヤナギ クロメヤナギ、コオリヤナギ、セッカヤナギ など</p> <p>3 繁殖                      (1) ヤナギ類はどの種類も発根しやすいので直接本ぼに挿し木する。                      (2) 黒マルチした挿し床に、切り下枝か前年枝の下部の葉芽の太く充実した部分を15~20cmに切り、水揚げ後挿す。                      (3) セッカヤナギの場合は、石化した枝から挿し穂をとると石化率が向上する。</p> <p>4 土壌改良、施肥                      (1) 堆肥を10a当たり2t施用する。pHは5.0~6.0に矯正する。                      (2) アカメヤナギ：10a当たり窒素、りん酸、加里を8~10kg程度基肥で施用し、入梅の頃にりん酸、加里を5kg程度追肥する。                      (3) クロメヤナギ：10a当たり窒素、りん酸、加里を10kg前後施用する。                      (4) セッカヤナギ：10a当たり窒素20kg、りん酸10~15kg、加里15kg程度施用する。</p> <p>5 定植                      (1) 4月頃に養成苗を植えるか直接本ぼに挿す。                      (2) アカメヤナギ：うね幅1.0m、株間60cm                      その他：うね幅1.2m、株間90cm</p> <p>6 整枝、せん定                      (1) 定植1年目：整枝、せん定は行わない。                      (2) 定植2年目：春に株元から15cm程度のところでせん定して主幹を作る。                      (3) 定植3年目：春に側枝を15cm程度で切り、3~4本の主枝を作る。                      (4) 定植4年目以降：毎年春に3~5m残して丸坊主に剪定する。                      ただし、生育が旺盛で枝が太くなりすぎるような種類や徒長枝では5、6月に新梢の太いところだけを30~50cmで摘心して枝数を増やす。</p> <p>7 収穫・促成・出荷                      (1) 露地物出荷：コオリヤナギは7月頃から、アカメヤナギ及びセッカヤナギは9月から4月頃の開苞期までに出荷する。なお、アカメヤナギは9月上中旬までに先端の展開葉を5枚くらい残して全部摘葉すると2週間後に苞や茎が紅葉してくる。                      (2) 促成物出荷：アカメヤナギ、コオリヤナギの花物を1~3月に出荷する場合は、切り枝を2日程度水揚げし、夜温10~15℃、日中25℃程度、シリンジを1日2回程度、遮光して促成する。                      ウンリュウヤナギは2~3日に切り枝し、10日間くらいに促成して新芽が出たら出荷する。</p>																																																																			
	中					下	徒長枝等の摘心																																																																	
	上					中	新し	アカメヤナギ 追肥																																																																
下	よう																																																																							
上	中	伸	<p>アカメヤナギ セッカヤナギ 露地物収穫開始</p> <p>コオリヤナギ 露地物収穫開始</p> <p>アカメヤナギ セッカヤナギ 露地物収穫開始</p>																																																																					
中				長																																																																				
下				苞																																																																				
上	中	紅		<p>アカメヤナギ コオリヤナギ ウンリュウヤナギ 促成・出荷</p>																																																																				
下						葉																																																																		
上	中	休				<p>アカメヤナギ コオリヤナギ ウンリュウヤナギ 促成・出荷</p>																																																																		
中							眠																																																																	
下							期																																																																	